

東大駒場友の会



会報第30号

秋の行事のご報告

村松真理子・永井久美子

昨秋以降に東大駒場友の会が主催した行事のご報告をいたします。たくさんの方の熱心な会員のみなさまの参加をいただきました。

「味覚のアトリエ@駒場 クラブ・アトラス×味覚の一週間」◆東大生へ向けての食育◆

二〇一七年十月二三日、東大駒場キャンパス内のレストラン、ルヴェンソングエールにて、東京のフレンチを代表するシェフたちの集う会「クラブ・アトラス」から、五人の料理長が駒場にあつまって腕をふるうセミナーが開かれました。これは、一九九二年以来フランスで料理界と教育界が共同で行っている「味覚の一週間」の日本エディションの一環として行ったものです。今回は、単に美味しいものを食べるのではなく、東大駒場友の会が「食育」として東京大学の学生たちに、「ともに食べる」という意味を考えてもらう、という企画で、フランス料理の歴史とその意義についての



伊藤文彰シェフのレクチャーにはじまりました。正式なテーブルセッティングで、フルコース、ワイン付で「本物の」フレンチを頂きながら、一皿一皿の食材と調理とそれを生み出した

地域の歴史についてシェフの一人一人からの説明をお聞きしました。今回、学生たちには、美味しい本物の料理をいただける幸せを知的に体験しつつ、フランスをはじめとする食文化の歴史や、食事をする場の社会的な意味について考え、マナーについても学んでもらいました。大変好評で、ぜひ来年も、という声が学生と、参加された会員から続出しました。

東大駒場友の会「秋の講演会」

東大駒場友の会主催で十一月二六日、駒場祭でにぎわう秋の午後、キャンパスの一角にあるファカルティハウス・セミナールームにて、二部構成で行われました。

第一部は「東大生の学生生活―学生の悩み聞いてみました」と題し、学生相談所特

任助教の細野正人先生が講演くださいました。ご専門の研究のお話を交えながら、普段ふれあっている学生たちの生活の様子や悩みを紹介し、解決のためのアドヴァイスについてお話しくださいました。

第二部は、ロバート キャンベル先生にご登壇いただきました。現在館長をお務めの国文学研究資料館と、平成二九年三月までお勤めであった駒場のそれぞれの特長を冒頭に紹介され、もともとのご専門であった日本文学を出発点とされつつ、駒場で触れた他分野との接点に新たな知見を見出す、現在進行中のご研究の一部を披露してくださいました。

今回の演題は「ポップコロン・オン・ザ・ギンザ」、副題は「近代日本の都市と文学を研究する傍らで気づいたことを一つ、二つ」。特徴的な主題は、戦後日本に滞在したアメリカ人女性によるエッセイに由来するといえます。GHQ本部にほど近い街であった銀座は、進駐軍用の売店が設置され、道路標識も英語表示とされるなど、終戦から一九五二年までの間、「リトルアメリカ」と呼ばれる様相を呈していました。

演題の由来ともなったエッセイを含め、右記の間の銀座を描いた小説や写真、絵画などを複数紹介され、占領下の都市をアメリカ側、日本側がそれぞれどのように描いたかを、ご講演では鮮やかに読み解いてゆかれました。

大変興味深いお話の後は、講師もまじえての茶話会で、参加会員のみなさんには、和やかに語り合いながら、学生たちの生活と駒場での文化や研究を思う午後のひと時



を共に過ごしていただきました。

共催・協賛の秋の音楽会

今シーズンも大変好評のうちに幕を閉じました。

十月一六日第一三七回オルガン演奏会

サムエル・クンマー（オルガン）、イレナ・クンマー（オルガン）。曲目はJ. U. シュタイクレーダー、バッハなど。独奏だけでなく、息のあった連弾がとても印象的な演奏会でした。

十一月三〇日 第二一回室内演奏会

宮田大（チェロ）、木村徹（ピアノ伴奏）。宮田大さんの奏でるストラディヴァリウスの柔らかな調べが夕暮れの音楽実習室に響き、聴衆をすっかり魅了しました。

女性活躍推進 — 企業の挑戦 —

岩田喜美枝

はじめに

女性の活躍は、男女平等の実現という人権的な視点からの議論や、日本の労働力人口の減少を補うものとしての期待の議論を経て、安倍政権は経済の成長戦略の中核に位置づけた。産業界でも、女性の活躍が企業の持続的成長のための重要な経営戦略の一つであるとの認識が一般化している。

女性の活躍が企業の成長につながるの はなぜか

一つは、日本企業では、本来はもっと活躍できるはずの女性が活躍できていない。企業が人材の無駄遣いを止め、女性人材の完全活用が図られれば、経営パフォーマンスにより影響があるのは当然だ。

もう一つは、性別に限らないが社員の多様性は、企業がイノベーションを通じて成長するためには不可欠だからである。モノカルチャーな企業と比較すれば社員構成が多様である企業のほうが、多様な消費者ニーズをとらえることができることに加え、様々な価値観、発想法、情報等が社内にもたらされ、それが融合する土壌の中で新しいアイデアは生まれると私は考えている。ソニーの創業者の井深氏は「イノベーションは常識と非常識がぶつかるところで生まれる」と言っているが、私は、企業の中心にいた日本人男性が築いてきたものが「常識」であり、「非常識」をもたらすのは

これまで十分には活躍してこなかった女性、外国人等であると解釈している。

日本企業が抱える3つの課題

女性がもっと活躍できるようにするためには、保育所や放課後児童クラブなどの社会的インフラ整備が重要であるのは言を俟たない。ここでは企業が挑戦すべき3つの課題について述べる。

(1) 子育てをしながらキャリアアップすること

これまでの育児と仕事の両立支援策は、育児休業、短時間勤務など仕事を免除することにより子育てを支援するものであった。これらの制度により、大手企業では育児休業から復帰して仕事を継続することが普通になった。ところが、このままでは、キャリアが停滞しているワーキングマザーが急増するリスクがある。人をキャリアアップさせるのは本格的な仕事体験の積み重ねであるが、仕事免除型の両立支援の期間が長く続くと、その間は責任ある仕事を与えにくく、キャリアが停滞するからである。キャリアを作るためには、育児免除型は最低限にし、育児をしながらもフルタイムで普通に働くことが望ましい。そのためには、以下の(2)に述べるような、残業のない働き方やフレキシブルな働き方を実現することが不可欠である。

(2) 全社員の働き方の常識を変えること

無定量な働き方ができることがこれまでは正社員のスタンダードであった。家庭責任のある女性はスタンダードに合った働き方ができないため、評価されにくい。また、

長時間労働であることが男性の育児等への参加を阻み、女性の負担を大きくし、これも女性が職場で活躍しにくい要因となっている。

残業がないことが当たり前という働き方に変えるためには、今よりも時間当たりの生産性が高い働き方を実現することが必要であり、そのためには、業務の選択と集中により業務量を削減することや、仕事のプロセスを簡素化し同じ成果を短時間で出せるようにしなければならない。また、一律の社員管理から、働く場所や時間についての個人の自由度を高めるような、フレキシブルな働き方（フレックスタイムや在宅勤務など）の実現も求められる。

(3) ポジティブアクションが必要

差別禁止や機会均等を保障するだけでは女性は男性と同じように活躍できるようにはならない。男女間格差の縮小を少しでも早めるためには、企業は意識的な、特別な取り組み（ポジティブアクション）が必要である。二〇一六年に施行された女性活躍推進法は企業・官庁・大学等に、数値目標の設定や行動計画の策定というポジティブアクションを義務付けた。男女に職業能力の差は本来ないが、実力に差があるとすればそれは経験の差だと思う。経験が不足している女性を数合わせのために登用するのではなく、時間はかかっても、難易度の高い仕事や未経験の仕事を与えながら女性の育成を急いで欲しい。

大学の教職員の課題

私はこれまで行政、企業、非営利団体等

で働いてきたが、女性活躍推進のための課題はどの組織も全く同じである。大学についても、女性の採用を増やし、育児期に仕事の継続を支援し、実力をつけながら要職を担う人材に育てることが必要である。そのために何をすべきかは、上記を参考にしていただくとともに、先進的な企業の取組から学んでいただきたい。

（公益財団法人 21世紀職業財団会長 東京大学
経営協議会委員 東大駒場友の会理事 一九六五
年文科一類入学 一九七一年教養学部卒）

バイロイトとワグナー

高辻知義

事情が許せば毎年夏にはバイロイトへ出かけ祝祭劇場でワグナーを観ることにしている。熱狂的なワグナー・ファンは兎も角それほどでもない方はバイロイトにワグナー専門の祝祭劇場がどうしてできたのか不思議に思われるようで時々質問を受けることがある。簡単に事情を説明し、原稿を引き受けた責めを果たしたい。

バイロイトに祝祭劇場ができたのは次のような事情による。バイロイトには、十八世紀半ばに建てられた、領主の所有にかかる「辺境伯歌劇場」という大きな歌劇場が残っている、とワグナーが聞いたのは一八七〇年三月のこと、劇場の規模・格・由緒、また大歌劇場のある諸都市からは離れていて、しかもバイエルンの領内にあるその位置などからして、自分の楽劇作品を上演する祝祭劇場として使用するのに相応しいもののように思われ、さっそく視察に

でかけた。その佇まいが大いに彼の氣に入ったので彼はいわゆる「バイロイト祝祭」の計画をただちにニーチェに語った。

ワグナーが若き古典文学研究者フリードリヒ・ニーチェと知りあったのは一八六八年ライプツィヒにおいてであった。ニーチェは以前からワグナーの芸術に熾烈な関心を寄せていたが、これ以降、ワグナーの「バイロイト計画」の助手としてよく働き、その実現に功があった。

さて、振り返ると、ワグナーは二〇歳のとき、ドイツのフランケン地方の中心都市ヴュルツブルクの歌劇場の合唱指揮者から音楽家としての経歴を始め、以後、地方都市の歌劇場の指揮者を次々と勤める、いわゆる「田舎楽長」の時代をすごし、その最後はバルト海の東岸、現在はラトヴィア共和国の中心都市リガの歌劇場の音楽監督に一八三七年の夏に就任している。

ワグナーは音楽家の経歴をはじめていい、やや身分不相応な贅沢に耽るようになり、リガに移るとドイツ本国の債権者たちの催促から逃れていられる気楽さに浸っていたが、一方で、ドイツ文化の極北の地点まで流れてきたという煩悶は彼を捉えて離さなかった。そこで一八三九年夏、新たにケーニヒスベルクなどの債権者から起きた訴訟によってリガの状況も切羽詰ったものになってきたとき、南のミタウで催された客演を良い機会にパリに打って出る決心を固めた。

フランスのカレーにつくと先輩作曲家マイエルベールと偶然にであう。彼のグランド・オペラはパリを席捲していたが、この

ジャンルの『リエンツィ』をリガで書き始めていたワグナーは差し当りこの作品でパリに地歩を占めるつもりでいた。ただ、パリの楽壇は彼の思惑に耳を貸さず、彼のいう二年間の「パリの地獄」が始まり、その不如意のなかで、ワグナーは己自身の道を進むほかないと決心をかため、いわゆるロマン派歌劇『さまよえるオランダ人』の台本と作曲にとりかかる。以後このジャンルでは『タンホイザー』『ローエングリン』の二作が続くことになる。

そのあと一八四二年に故郷のドレスデンで『リエンツィ』上演の話がとどき、彼は帰国して故郷の宮廷音楽監督という高い地位につく。しかし、一八四九年、パリの二月革命の余波がザクセンに及ぶと、顕職を投げ打って蜂起に参加したため政治犯とされ、友人リストのおかげでスイスへ逃れることが出来たが、ここから亡命者としての長い国外生活が始まる。またこの間、パリを幾度も訪れて、オペラ座での自作の上演を実現しようと試みるが、徒勞に終わり、次第にパリ憎悪の気持ちにたぎらせるようになる。そこには不吉なユダヤ人憎悪の感情も含まれており、後のドイツ国粋主義の一派がヒットラーを筆頭にワグナーを自分たちの先駆者として崇めるような誤解の伏線となった。そのあと一八五六年にザクセン国王に部分恩赦を願ひ出て叶えられ、ドイツへの帰国も可能になったが、何よりもバイエルン国王ルートヴィヒ二世による援助とミュンヘンへの帰還が後の偉業を完成する礎となった。そして一八七二年には住まいをミュン

ヘンからバイロイトに移し、「ヴァーノンフリート荘」と名づけた。「すべてのヴァーノン(妄執)から離れた平和によるフリート(満足)の境地」と言う意味であろう。そして、地元有力者たちの熱心な協力も得て宿願の祝祭劇場の建設と「バイロイト音楽祭」の開催の準備に取り掛かり、一八七六年八月十三日に第一回の「バイロイト音楽祭」が開催された。ルートヴィヒ二世、ドイツ皇帝ウィルヘルム一世のほか、リスト、ブルックナー、チャイコフスキー等の音楽家の見守る中『ニーベルングの指輪』四部作が初演された。

(本学名誉教授 ドイツ語・表象文化論一九五五年文科一類入学 一九五九年文学部卒)

哲学から落語へ

日野公純

私は、昨年の九月末、落語家の古今亭菊太楼に入門し、芸の道で生きていくことになりました。既に「古今亭菊一」という高座名もいただきました。今年の九月頃には、寄席での前座働きが始まる予定になっています。今は、それまでに習得しておくべき立ち居振る舞いや、前座噺を叩きこまれているところです。

駒場で過ごしてきた六年間、私は、落語研究会に所属していました。高校時代から落語が好きだった私は、大学でも落語に打ち込みました。先輩たちに「落語以外の笑いや手掛けると良い、参考になるかもしれない」と言われ、漫才やコントにも積極的に取り組みました。当然、毎回思っていたよう

な笑いが取れるわけではなく、台本の書き方や演技面など、様々な苦勞がありました。

その中で、大学での哲学研究の経験は、非常に役に立ちました。落語やお笑いの台本を書く上での苦勞には、単純に分けるならば、二種類があります。まず、「人間はどうしてこのような誤解をするのか」「どうすれば筋に一貫性を持たせられるか」という、作品や登場人物などの内面を深めるという点。そして、「お客様は何を求めているだろうか」「どう見ればお客様に分かりやすいだろうか」という、観客の視点を意識して見せ方を研究するという点。このような課題に取り組むに際し、まず問題を分割し、また問題同士の関連性を考慮しながら、プロの技術を参照したり、お客様からのご意見を取り入れたりもしました。様々に試行錯誤することで、自分自身の率直な表現でありつつ、お客様にも喜んでいただける、そんな作品を創り上げることを目指しました。このような落語研究の甲斐もあってか、二〇一七年の二月と八月に開催された学生落語の全国大会では、百人以上の参加者の中から決勝に進出することが出来ました。就職活動もして、内定もいただきましたが、やはり、落語を通じて人々と関わることを生涯の仕事としたいと思い、両親とも相談し、入門する決意をしました。しかし、これからの人生では、「東京大学」という学歴も「素人の大会で評価された」という経歴も、何の役にも立ちません。当然、そのような肩書きがきっかけで、何かしらの場に呼ばれる、ということはあるかも知れません。とは言え、そこで芸がしっ

かりしていなければ何にもなりません。これまで自分の中で築き上げたものを一度捨てて、ゼロから、プロとしての芸を積み上げていかねばなりません。

しかし、一つの道に取り組んで、様々な先達から指導を受けながら、自分の形を創り上げていくという過程は、初めて踏むわけではありません。私は、大学・大学院で、サルトルという、哲学・政治・文学などの多分野に渡って活躍した、一筋縄ではない扱いにくい思想家を扱い、卒業論文と修士論文を執筆しました。サルトル研究者は、今の日本にはさほど多くないのが現状です。しかし駒場では、学科の垣根を越えて、更には本郷の理系の学生などとも意見を交換できるような場が多くありました。

哲学であれば古代ギリシャ哲学、ストア派哲学、ドイツ観念論、精神分析、分析哲学、更には文学や認知科学など、様々な専門の人々から、私の研究主題について意見や質問を投げかけられる機会がありました。そこでの対話において私は、恐らく八割がた、自分自身の考えの輪郭をより明確に言語化するように努めていたように思います。そして残りの二割ほどは、相手の指摘にハッとさせられた部分をどうにか取り入れようとしながら、考えを更新しようとしていました。「私と他者とが、どこで異なり、どこで繋がっているのか」、それを、出来る限りきめ細かく描き出そうとすることは、学問のみならず、あらゆる営み、勿論落語においても不可欠なことだと感じています。

他に競合する娯楽も多く、テクノロジーの進歩とそれによる人間の精神性の変化も

あつてか次々と新しいものが求められる現代において、落語という芸能が生き残っていくことは当たり前では無く、寧ろ苦難の方が多くかも知れません。しかし、その中でも、駒場で人々と共に哲学を営み、独自性と普遍性との間を往来する中で培った、芸道において欠かせない「不易流行」とも似た姿勢を持って、自分の生きる道を開拓していきたいと思っています。

古今亭菊一を、末永く応援いただきますよう、何卒、よろしくお願い申し上げます。
(二〇一二年文科三類入学 二〇一六年教養学部教養学科卒 東京大学大学院総合文化研究科 超域文化科学専攻 比較文学比較文化コース修士課程在籍)

公開講座「高校生と大学生のための金曜特別講座」のご案内

新井宗仁

東京大学教養学部では、高校生・大学生・社会人向けの公開講座として「高校生と大学生のための金曜特別講座」を年間十数回開講しています。高校生と大学生の進路選択の参考となるように、東大教員が各々の専門分野の魅力をわかりやすく解説しています。講座のテーマは文系から理系まで多

東大駒場友の会第二回活動報告会のお知らせ

二〇一八年六月二日(土) 午後四時四十五分より
会場：駒場ファカルティハウス・セミナー
詳細は追ってご案内いたします。

岐にわたります。一般の方々もご参加いただけます。参加費無料、参加登録不要で、二〇〇名先着順です。毎回六〇分の講義と三〇分の質疑応答があり、質問多数の場合には高校生・大学生を優先しています。来場者の約六割が高校生と大学生、約四割が社会人で、小学生や中学生の受講者もいます。また全国六〇以上の遠隔地の高校にもインターネットで配信しています(ネット配信は高校限定)。本講座を基にした書籍はこれまで十一冊刊行されており、昨年「知のフィールドワーク 科学の最前線を歩く」(知のフィールドワーク 分断された時代を生きる(白水社)が出版されました。

東大駒場友の会は、昨年からの講座の協賛をしており、友の会会員の皆様には、会報と一緒に講座の案内をお送りしております。今年四月から七月までは、アメリカ外交、タイムマシンの、人工知能、バイオテクノロジー、スポーツ、数学、言語などについて七回の講義を開講予定です。詳細は同封の案内チラシをご覧ください。皆様のご来場をお待ちしております。

(総合文化研究科 広域科学専攻 生命環境科学系教授/教養学部 社会連携委員会委員長/一九九〇年理科一類入学 一九九四年理学部卒)

駒場博物館より常設展のご案内

二〇一八年三月五日(月) から六月二九日(金) まで所蔵品展を開催いたします。常設展示しているマルセル・デュシャンの大ガラス(東京ヴァージョン)のほかに、中国の考古学資料等を展示する予定です。なお、所蔵品展の期間中は平日のみの開館となり、土日祝日は休館いたします。

穏やかな日差しの中でゆったりとくつろぐことのできる

フランス料理

ルヴェ ソン ヴェール 駒場

駒場友の会の皆様がお食事の際に注文なさったコーヒーは、お支払いの際に会員証・会友証をご提示下さいますと無料になります。

[営業時間] 11:00~14:30、17:00~21:00

Tel : 03-5790-5931 / Fax : 03-5790-1902

◎駒場ファカルティハウス内

東大駒場友の会会報【第30号】2018(平成30)年3月15日発行

東大駒場友の会 会長 浅島 誠

〒153-8902 目黒区駒場3-8-1 東京大学 駒場ファカルティハウス内

電話 : 03-3467-3536 FAX : 03-3465-3334

メール tomonokai@post.c.u-tokyo.ac.jp

ホームページ <https://tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp/>

デザイン・印刷 株式会社双文社印刷

<http://www.sobun-printing.co.jp>



会報のバックナンバーをインターネット上でご覧いただけます。

東大駒場友の会ホームページのトップ画面に「会報バックナンバー」というボタンがありますので、そこからお入りください。